

きびのさと

N.081 月刊

昭和四十年三月一日発行 (非売品)
岡山県都窪郡吉備町東町三三三宮垣方 呼電四三七
吉備 観光 協会

山田の梅林

福田村坪井の若宮大明神(舊二響宮祠盛参照)の宮から北へ約百メートルの所に、北と東にひろげ、見晴しのよい山畑がある。ここに昔四、五十株の梅樹があつて山田の梅林として知られた名所であつた。初春の候ともなれば萬花の魁として女人ばしい香を放ち近在の人々は憩ひの場所として年当を携え家族を連れ、観梅の風流を味はつたものであるが惜しいことに明治四十年頃に全く枯死してしまつた。其の後部落では保勝会を新たに組織して樂園地をつくり、そのあとに桜樹數十株を植えて復活に努めた。此も漸く咲き揃ふて見境になつてきたから、大東亞戦争は耐となり、食糧増産のかけ聲に應じて全部伐採してしまつた。それは終戦の昭和二十年の歳であつた。いま山畑には梅林の名残りをとどめる石碑が遺つてゐるのみ。横江種、高さ五呎程の石面に「香回悟堂書 折らぬ」と心に雪の花かともうたがはせつ梅さきにけり 淡粵。裏面に「公森太平建之」とあり。公森太平は太田田の出身、経済学者公森太郎の祖父である。

天神山の果樹園

大内田の用水天満宮の鎮座する山嶺一帯にある。この果樹園は田樺川町長太田清作が私費を投じて明治四十年頃五町歩ばかりの山林を開墾し、桃、梨、柿、葡萄、枇杷などの果樹数百株を栽培したことに始まる。経営は年々逐ふく定まり結ぶ出荷も行われ

が公暇の傍、他人の手に委せての経営なので自然放漫に流北赤字統となり、到底成集が保たれず大正十年の頃に親戚に当る岡山市津島の雄波隆志が、一段当り百五十円で一町歩余りき一千八百円で買取り、他は島村 勉、坪井織太郎、小野益一等の人々が譲り受けて現在個人別に経営が続けられてゐる。

果樹園は昔越川なる早島へ山越したという旧峠道に沿ひ、娼婦の美を競ふ四月上旬の閑花朝ともなれば天満宮の境内に佇んで眺望する景観は最も佳にれて、遠く岡山市の素畑を望み、眼下にピンクの色うるわしく、四周の緑樹を背景に、ひろげられた満花は一幅の絵の如く、近郊稀れにみる賑を呈するのである。

(正保十四年十一月、備前藩書前帳に「下津井村より天城村道三里或格九町、天城志里塚より備中境目迄格四町、但レ岡山より下津井道八里三格或格同」とあり)

創始者太田清作は岡山市島田の坪田兵作の子にして明治五年生れで福富の太田七平の養嗣にきた人である。太田家は代々打身膏の家傳業を業とする素封家にして、田畑七町歩余を有し福富七三番地に横い屋敷をもつてゐた。清作は生来太腹の男で町民の信望を得てゐたが、反面負けじ嫌の性格があつたので一部では反感をかき、疎せられたようである。初め妻常江との間に賜津子孝子正志貞子一男三女をもうけ、清作が四十二歳の時五人目の女の子を産んだが、母子ともいだが悪くして不幸にも他界したので、二十歳も歳下の小田郡川面村の池田芳吉の長女市野を后妻に娶つた。市野との仲は文子、昇、錦雨の一女二男をあげたが、経済的觀念に乏しく晩年には家財を散じ私家も売却して閑静な塚山の山中に二番地に退隠し、俗塵を遠ざかつた生老を送つた。物心には苦惱したらしく昭和六年二月十八日病のため六十歳で寂しい境涯を了した。

もて信成寺に先祖累代の墳墓が数基あつたが、いまは犬養本堂翁の墓になる。大田家累代を墓に遷して、まづ墓に改葬してゐる。法名を寛量院清照日慈居士といふ。忠孝の子の賜津子は京都に、貞子は仙台に居り、孝子と正志は北七してゐる。正志にむきた昇は大東亜戦争に負けたの姉文子と清洋の五十五歳の時に生れた次男の錦商が現在当主として一町歩余の果樹園を經營してゐる。

福富の四屋敷は八畝歩ばかりの畑地となり、北裏に当る所に四倉庫一棟と、南の道に面した表の門長屋の一部が残つてゐる。因に童話作家として知られる四山市の出身坪田讓治は清作の甥に当る人である。

○ 松林寺脇の常夜灯

庭畔城の西濠の東北隅、旧藩匠岡西雪林の屋敷前の塀端に、高さ二十五米ほどの木造建、屋根は方形の構造をした常夜灯があつた。藩政時代に物資交易の船舶が暗夜にこの灯明を目当に入港したものであつた。創建は不明なる由文政の頃の改築と傳へてゐるが確証はない。昔は油灯を用ひ、塀端筋の住民が梅番制で維持してきたが、明治中期になつて電灯設備に変わったのである。藩政以来百数十年の間庭瀬の要港として多数の船舶がこの崖壁に繫留せられ、港町として賑盛を極めたものであつたが、明治廿四年四月廿五日山陽線が岡山から倉敷まで開通し、庭瀬駅が設置されて漸次海運は鉄道に奪われ次第に船舶の出入も減じ、今では全くその影をみせめてしまつた。濠池は浅くなり水草は徒らに水面に繁茂して汚水を覆ひ、昔の姿は見られなくなつた。

船舶にかわつて道ゆく人々の交通安全灯として、その老りは親まれ、昔ながらの右風を姿を濠畔にうつれてゐたが、昭和廿九年九月廿六日の暴風に上部の火袋の部分か

吹き飛ばされてしまつたので修復の術もなく全部取毀してしまつたのである。

常夜灯の基台の傍に、直径五程、高さ四程の円筒形の石が建てられてゐる。これは昔船舶と繫留するに用いた繫留石の遺物である。(燈火とは信仰上から出た言葉で、昔から神佛にともかひを捧ぐ心の光明(燈包)を祈る習慣がある。この常夜灯は航海の神といわれる讃岐の金毘羅大権現を祭り玉袋の多く海上の平安を祈るため、船舶業者が信仰上から建てたものである。)

○ 旧遊女街のあと

旧国道が定抗心、倉敷と鬼島方面へ伸びる道筋に藩政時代に遊女街があつた。今は家屋も改築または取り毀れて旧態の面影はない。古老の語によると角屋、竹屋、小川屋など数軒の料理屋、宿屋があつた。角屋は二ル三番地野村栄一の處、竹屋は四中学校の前、西側にあつた。松屋は道標を西に曲つた道筋の南側にして、いま二八一番地荒木兵子の所有になつてゐる。小川屋はその西の妹尾川用水路を渡つた取りつきの南側、雄波一軒の屋敷である。また屋号を遷したが松屋の筋向うに一軒あつた。いまは雄波加平治一ニ。番地の所有になつてゐる。現在いづれも家屋は建替られゐるが、雄波

加平治所有の二階建と、松屋のあとのみである。松屋の家屋は傾いてゐるが往時の構造をそのまゝに遺してゐる。間口三間、奥行四間。表に面して角格子の長窓があつた。軒が低くくたれた二階建である。雄波加平治の所有家屋に、このような傳説がある。

雄波氏が譲り受けて貸家にしたが、住む人が永く遠く去り次第とかわる。偶誰かいうたなく「あの屋敷には真夜中になると風もないのに微妙な音をさせ、寝てゐると、うたさし胸をおしつけられ苦しむ」といふ噂がたつた。雄波氏も意味悪く思ひ、昭和の十七、八年頃西弘院の僧を招いて加持祈禱した所、昔ひとりの旅が出家が数日間

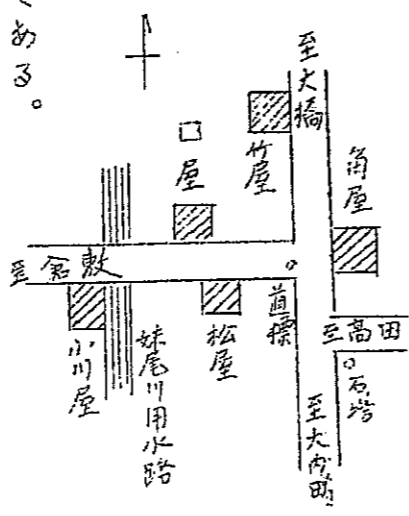
滞在しなにもするともなく一室にとじ籠つて、うち沈んでいたが、執然と立ち去つてしまつた。この武家が旅だつてから数日後、ひとりの女が訪れさきに旅に出た武家の行方を問うた。料亭では知る筈もなくすむに数日前にどこともいわず出てゆかれた。と答へると、女は一夜の宿を乞ふて休んだが、その夜、この女は喉をかき切つて血に染まつて絶命した。名を「さよし」といい、遺書もなく身元も不明、引き取り手のないままに彼人の検死を給つて定坑のムソバ(火葬場)で荼毘に附した。勿論「さよし」を吊ぶ人もなく、無縁の教に入れてこの地に葬つた。

この茶屋のなほ七霊が、まに迷うて家人を悩ませていることがわかり、娘波氏は赤飯一升を供え怒りに供養をした處、その後まにの罪障もなくなつたという。この女は武家のあとを追うて梅川表まで来たが、再会が叶わぬと思ひあまつて自殺した裏面にはなにか深い事情が秘められていたことであらうが、この謎は永遠に解けないであらう。

往時吉備津の宮内は公娼鬼許の遊女街として知られてゐるが、ここは少規模な娼妓的色街であつた。日坂ともなれば紅粉をまたうた遊女が嫖客を相手に春をいさいだものであつた。昔は金毘羅まゝりや吉備津詣りの旅人の憩いの場所であつたので、鬼島あたりから入力車夫が客引きに連れ出してお客の奪い合があるなど賑わつたものであるが、明治廿四年以後山陽鉄道が開通し、また宇野線も通じて往來は次第に減じ、昭和八年には国道も亦北の新国道に変更したので、今は全く界限も寂れ寂れさんざめく音曲も聞えなくなつた。

○ ムソバ (火葬場)

我國太古においては人間が死するとその遺体は汚穢物と同様に扱われ、たようであるが、欽明天皇の、五三時代に佛教が傳わつてから靈魂不滅の説によつて死体は丁室に取扱われ木棺や石棺に納められ一定の地塊を区画して土中に葬られた。また火葬の方法もとられた。即ち遺体を焼却して白骨とし、これを細骨がめに収めてカリモガリして墓地に埋葬し墓標をたてるのである。



十日僧の道昭がまは、七十二歳で没した時に遺言によつて荼毘に付した。これが火葬の始めとされてゐる。大聖二年(七〇三)の十二月十七日には持統天皇(女帝)薨去の時に止葬になれ給うた。(舊蹟古墳叢書参照)御土では此から七年下つた元明天皇の和銅元年(七〇八)十一月廿七日の銘文のある銅製の骨蔵器が矢掛町東三成の土中から発見された。これは当時の博学者吉備氏奥備の祖母夫人の墓所とわかり吉備氏の出身地であることが確証されたのである。かように千余年の昔から地方的にも火葬が行われていたのである。さく吉備町地内の火葬場であるが、藩政時代から村毎に設けられていた。即ち大内田、塚山は塚山へのぼる、もと小学校であつた所のほりにある。園戸、妹尾崎は福田村とさかいになつてゐる所に三尊と呼ぶ中にある。西花尾と東花尾は西部落のさかいのギンギリ山の古墳の頂を利用して設けられてゐる。川入、東山部落は俗にオオシンバイという山の西裾、通べりにある。(オオシンバイというは「御神様」の義から出た地名である。この山は昔から川入分の村有地にれて、唯一の山林地帯である。

郷里では火葬場を「ムソバシ」といつている。ムソバは穢けがらさくろしい場所、汚穢けがらから出た言葉であろう。また死した人を土葬にしたり、火葬にしたりするものを昔は非人とか隠亡かくしなといつていた。隠亡とは「なくなつた人」をかくすこと、つまり死人の墓穴を掘つたことから起つた言葉なのである。昔は身分を土、農、工、商の階級にわけていたが、この人たちはその系列外に置かれ、極く身分の低いものとされつた。非人と列んで穢多けがらといふ言葉がある。ものの本に昔朝鮮から帰化した人種で、革細工を職業としていた人である。エタとは餌取りの尊訛うんぎである。餌取りとは動物の皮を剥ぐ業を営むことで、佛教国では動物の殺生行為を最も嫌ひ、罪悪とされていたので、けがれ多い下劣な職業として隠亡と同様見下げられてしまつたのである。

明治五年に従来の身分制度が改められ土は士族に、農、工、商は平民となり、この非人、穢多の人たちも平民に編入されたのである。しかも今では全く身分の階級はなくなつた。

庭瀬駅前繁昌記

庭瀬駅は明治廿四年四月、山陽鉄道株式会社さんやうてつどうの経営で山陽線が開通と共に設けられたものである。当時は賀陽郡庭瀬村といつていた。最初駅が設置されるにあつて郡庁即撫川村（後ち都窪郡となる）と問題が起つた。それは撫川村は發着都窪郡役所（應徳寺にあつた）があり、警察署（旧郵便局の場所）などの諸官衙が置かれ、即の中心地として賑やかな街づくりであつたので、撫川村民は拳つて誘致運動に躍起となり、盛んな陳情が繰り返されたが、その位置が足守川の堤防に近く、線路に勾配があつて適當の用地がなかつたので地形上やむなく東に寄つた現在の處を買収に決まつたのである。そして乗降客の数量や取扱貨物の集散區域が駅務範圍として、北は足守方面、南は妹尾、早島方面まで広い地域に亘つていたので推定調査の結果、將來が約束されていった。備中地内では倉敷、笠岡を除いては駅構内も広く配線状態も充分考慮されて設けられた。従つて駅前通りも旅館、料理店や運送業者、さては地方特産の花菱業者などが將來を夢みて多くここに集まつてきたのである。

宿屋、料理屋としては加茂屋、福智屋、新屋（あたらし）、木広など相ついで開業した。その外小さな飲食店、一杯屋が軒をなうべた。全盛時代には芸者の四、五名を抱え、三味線の音に合せて、さんざめく嫖客の歌声さえ街上に流れる有様であつた。

当時流行してゐたラツパ節に

「この辺の飲みやをいぢいちしラべたらうー栗坂やに万能屋、身（ことぶき）、卯月、松ヶ枝。

三角楼、加茂や、福三、新や、トコトコトコト。と、この歌が流れてゐる。いまでは時世の波に流され、いづれも、すたれてしまつたが、西向の小即利郎の栗坂やのみが一軒。国道の駅前停留所の西隣りに移つてゐるが永続し榮えてゐる。

（おわり）この項未完

吉備町 中田

吉備町下撫川

ホームターミナル
サービスステーション
平松ターミナル

建築業
高島組

吉備島電 二五三番

吉備局電 238
有線 6811